



# 桐の花

令和3年

7月16日

校長 中村 雅一

横浜市旭区万騎が原 31 TEL 045-391-5514 FAX 045-391-5537

URL <http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/jhs/makigahara/index.cfm>

『二平方メートルの世界で』

校長 中村 雅一

東京オリンピック・パラリンピックの開幕が間近です。東京の感染者数が変異株の影響からなのか増えており、今月12日から東京都に緊急事態宣言が発令、オリンピックもほとんどの会場が無観客で開催されることになりました。コロナのパンデミック下で行われようとしているこの夏のイベントが、その後の子どもたちの学校生活や行事にどのような影響を及ぼすのか心配です。子どもたちにとっては、たった一度の仲間との中学校生活です。オリンピックが「特別なイベント」として実施されるといふ動かぬ結論から、様々な矛盾と混乱が浮き彫りになっているように感じます。今、私たちが求めていることは、どこまでが安全で、どこからが警戒しなければならないのか、責任と科学的な専門知識に基づいた情報や対策です。このコロナでは、大人が子どもにうつす方が圧倒的に多いこと、高齢者や基礎疾患のある人が重症化するリスクが高いこと、コロナ患者が特定の病院だけで病院間での連携や応援体制がないこと、国産ワクチンがまだないこと、などを考えれば今やるべきこと、何を優先し急がねばならないかは、はっきりしているはずで

さて、先日、一年ぶりに、めぐみ在宅クリニック院長の小澤竹俊先生と千田恵子さんを招いて、1、2年生それぞれで「いのちの授業」が行われました。1年生の導入、「仲良しハルちゃん、なっちゃんのお話」の場面が印象に残っています。二人は大の仲よしだったのですが、他のグループの子と遊ぶハルちゃんを見て、なっちゃんが腹を立て「ハルちゃんなんて、いなくなればいいのに！」という攻撃的な言葉を言ってしまいます。「なぜ、仲良しの友達にひどいことをしてしまったのかでしようか？」という、問いの場面です。

多くの生徒が三択の中から「裏切られた／友達を失った気がして悲しかったから」に手を挙げ、答えていました。講師の千田さんから「人は自分が苦しくて、人を攻撃したり傷つけてしまうことがある」「苦しくて、苦しくて自分を傷つけてしまうことがある」と話されました。なっちゃんは、やきもちを焼くような思いだったのかもしれませんが、「嫉妬」や「ねたみ」は不幸の種です。「ねたみ」が人を不幸にするのは、「自分の持っているものから喜びを引き出す代わりに、他人が持っているものから苦しみを引き出しているから」と言ったのはイギリスの哲学者、バートランド・ラッセル（1872～1970）です。その苦しさゆえに人や自分を攻撃してしまうことは、なんとも悲しいことです。

また、ラッセルは、不幸の原因は「ねたみ」以外にも、「退屈と興奮」があると云います。人間は現在の状況と想像上のもっとも快適な状況とを比べることで、退屈を感じてしまう生き物です。ですから「退屈」の反対は「快楽」というより、「興奮」だといえます。人間が狩猟するのも、戦争するのも、求愛するのも、興奮を求める要素があるのかもしれませんが。ギャンブルやゲームも例外ではないでしょう。とはいえ、刺激にはきりがありません。「多すぎる興奮に慣れっこになった人は、コショウを病的にほしがる人に似ている」と、例えられます。ですから、幸福になるためには、ある程度「退屈に耐える」力、「退屈を楽しむ」力を養う必要があるわけです。その力とは、よく旅行先の携帯電話の電波が届かない自然の中で、人間らしさを取り戻す感覚であるのかもしれませんが。子供たちのケータイ・スマホの使用では、この「退屈と興奮」の中毒にならないよう大人が適切な管理を怠らないこと、親子間でルールを作り守らせることが大事で、このことは子どもが未成年の間は大人の責任です。

話は戻りますが、講師の千田さんは、「苦しみは『こうあれば良いなあ』という希望と、『実際にはそうではない』という現実の開きである」と言われました。この「希望と現実」のギャップで、それを埋めようとすれば「努力」となりますが、埋められないギャップからのストレス発散や不快感を消す目的で人を攻撃すれば、「いじめ」や「ハラスメント」になります。「いじめ」も最初の入り口は「いじっていると楽しい、ゲーム感覚」などの軽い気持ちから始まる場合があります。その後、おもしろいから、楽しいから、相手の非や欠点を口実に自分を正当化してストレス発散になるからと、やめられなくなっていくます。コショウをほしがることと同じです。そこに加害側のストレスが大きくなったなどの状況や、さらに「みんながやるから」等の集団心理や同調圧力が加わり、また思春期の攻撃性の高まりなどが組み合わさって、ついには加害者自身も自分の行動がやめられず抑制できなくなる、といった過程を経て、いじめは深刻化すると考えられています。深刻化して取り返しのできないことにならないためにも、被害が大きくなる前に早期発見、早期対応が大切であることは言うまでもありません。

では、私たちは「苦しいから」といって人も自分も傷つけず、穏やかに過ごすことはできないのでしょうか。小澤先生も千田さんも、「苦しみの中でも、穏やかだと思えるには、将来の夢や支えとなる関係があること、選ぶことができる自由があること」、「目の前で苦しむ人に私たちのできることは、苦しむ人の援助者になること」と話されました。その援助とは、相手の苦しみのすべてを理解できなくても、相手を心配してその苦しみをひたすら聴くことだといえます。それは、時に苦しむ人とともに苦しむことなのかもしれません。苦しむ人はそんな自分の話を真剣に聴いてくれる人に出会った経験から、それまで気づかなかった大切な自分の「支え」を知ること、自らの困難と向き合い、自分自身を大切に思えた

り、人に優しくなったりすることを学んでいくのだと思います。

誰もが様々な事情や背景を持って生きています。小澤先生の「いのちの授業」は、さまざまな困難に遭遇する人生において、自分の苦しみに向き合うことができ、目の前で苦しんでいる人に関われる人が少しでも増えて、「自分を認め、人に優しく、折れない心を持つ社会が実現することを願っている」のだと改めて思いました。

おわりに、生徒の皆さんへ、紹介したい絵本があります。札幌の小学6年生、前田海音（みおん）さんが3年生の時に書いた作文がもとになっている『二平方メートルの世界で』という絵本です。どのような内容か簡単にお話します。海音さんは、生まれたときから脳神経の病気の治療で3歳の頃から入退院を繰り返していました。入院するとしばらくベッドの上での生活となります。次は、海音さんの言葉です（絵本の本文より）。

—「病室のベッドの大きさは、たて二メートル、はば一メートル。  
そのまわりをぐるりと囲うカーテンの中が入院中のわたしの世界のすべてで、  
ねる、食べる、遊ぶ、勉強するなど、だいたいのはカプセルみたいな空間です。  
ここでわたしはいろいろなことを見たり、聞いたり、感じたりする。」—

入院中、お母さんは一緒にいてくれますが、家ではお兄ちゃんが鍵っ子になり、海音さんはお兄ちゃんに申し訳ない気持ちになります。同時に、どうして自分だけが病気なんだろう・・・

・・・という、どうにもならない思い。

そんな入院中のある日、たまたまいつもとは頭と足を逆にしてベッドに横たわると、備え付けのオーバーテーブルの裏に、たくさんの落書きが目飛び込んできました。

「みんながんばろうね」「再手術サイテー」「ママにめいわくかけちゃってる。ごめんね」「なんでもたべられるようになりたいよー!」・・・  
海音さんと同じベッドを使っていた、顔も名前も知らない子どもたちの言葉でした。

海音さんは、「わたしはひとりぼっちではなかった!」、そして  
「病気といっしょに生きる仲間がいること、いたことを、わたしが代表してみんなに伝える役割なのかなあ」、  
「病気の子どもたちのかすかな声を、文字にできるぐらいには、わたしは元気で自由だ」と、希望や使命感を持っています。二平方メートルの狭い病院のベッドで海音さんが発見したものは、「広い世界」だったのです。海音さんの周囲への心づかい、病気というどうしようもないことへの葛藤、そして悟り、希望を持つ。そんな小さな女の子の心の内が見事に描かれ、生きる勇気、困難に立ち向かう勇気を与えてくれます。海音さんの言葉です（絵本の本文より）。

—「病気があるわたしのような子どもが、将来にゆめを持つことや、自分にできることを見つけるのは、  
とてもむずかしい。  
だけど、明日のことがだれにもわからないのは、病気があってもなくても同じだと思う。  
一日一日の大切さを、いっしゅん感じたり見たり聞いたりすることの大切さを、わたしは知っている。  
生きていることのすばらしさは気づきにくいということも、わたしは知っている」—

令和3年7月12日

## 自分自身の生きる道を考える ～3年進路学習会～

高等学校の先生方が来校され、各学校の校風やカリキュラム上の特色等について説明をしていただくという、3年生の進路学習会を6月29日（火）に開催しました。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で開催することができませんでしたが、今年度は、18校の先生方に来校していただき、3年生の生徒たちは、直接お話を聞くことができ、各自の進路や生き方について考える良い機会となりました。

〈神奈川県立高校〉

県立旭高校、県立希望ヶ丘高校、県立霧が丘高校、県立商工高校、県立松陽高校、県立瀬谷高校  
県立二俣川看護福祉高校、県立保土ヶ谷高校、県立横浜旭陵高校、県立横浜緑園高校

〈横浜市立高校〉

市立戸塚高校、市立横浜商業高校、市立みなと総合高校

〈私立高校〉

柏木学園高校、日本大学藤沢高校、横浜商科大学高校、横浜清風高校、横浜隼人高校

## 「いのち」を考える ～1・2年いのちの授業～

6月29日（火）に1・2年生を対象に「いのちの授業」として、めぐみ在宅クリニックの院長小澤竹俊先生、千田恵子さんにご来校いただき、ご講話をいただきました。自分が苦しくても誰も傷つけずに生きていくという考え方について話をさせていただき、生徒たちは真剣な眼差しで話を聞いていました。その後、教室で振り返りを行い、一人一人が話を聞き、感じたり考えたりしたことを書きました。



### 【生徒の感想です】

- ☆今回授業を受けたことで今の悩みに向き合うことができました。悩みに向き合うことで自分だけを責めたりしないように頑張ろうと思います。そして、他の悩んでいる人の悩みも積極的に聞いて、悩んでいる人を減らしていきたいと思います。
- ☆苦しむことは無駄ではない。だけど、苦しんだ後が大事。どう解決するかが。人に相談するか、自分でどうするか判断して行動する。
- ☆話を聞いて「支え」は本当に大切だと思いました。自分も今まで、辛いことがあったときは、親や友達が支えてくれたからこれからは自分が誰かの支えになれるようになりたいと思いました。
- ☆今回の講話で、本当の幸せ、苦しみの理由、苦しみから抜け出すためにはどうしたらいいのか、自分の大切な人、ものなどはなくなってから大切なことに気づくなど多くのことを教わることができました。こんかいおそわったことをもとに苦しいと感じたときは自分の支えになるものや人を失わないよう気を付けていこうと思いました。
- ☆支えとなる関係の人がいるという事の大切さを知ることができました。苦しみがあっても笑顔でいられるのは自分じゃできない事だと思ったので、苦しくても笑顔でいられる人になりたいです。
- ☆自分のことを支えてくれて、認めてくれる人の存在を大事にすべきだと思いました。自分を責めず、自分のことを大事にしてあげることが、自分にとっての幸せだと思いました。
- ☆今回の講話で、相談の聞き方を教わり、とても参考になりました。もし、これから誰かに相談されたら、今回の講話の内容を参考にしたいです。

## 全国大会

〈水泳部〉

女子4×100mフリーリレー

## 関東大会

〈水泳部〉

男子100m平泳ぎ

女子100mバタフライ・200mバタフライ

## 県大会

〈柔道部〉

60kg級

66kg級

〈卓球部〉

女子個人

今年度は8月10日（火）～16日（月）までの平日を学校閉庁日とさせていただきます。この期間は、電話は留守番メッセージによる対応となります。緊急の連絡、生徒の新型コロナ陽性判明に関する連絡については、西部学校教育事務所（336-3743）へ平日の8時30分～17時15分の間にご連絡願います。